

# 大学が消える街

箱崎は今

紙片に学生二百人ほどの名前と住所がびつしり書き込まれていて、「下宿帳です。戦前、警察官が思想調査に訪ねてくるので、うちにいた下宿生の連絡先を記録したのが始まりです」。

紙片に学生三百人ほどの名前と住所がびつしり書き込まれてゐる。「下宿帳では、池田さんの亡母ツチ工さん。食欲旺盛な若者の朝夕食を賄い、昼は弁当を持

調査に訪ねてくるので、こちにいた下宿生の連絡先を記録したのが始まりです」。

池田善朗さん(七四) 福岡市  
東区美和台IIは振り返る。

東区美和台IIは振り返る。  
九州大学箱崎キャンパス  
の近くにあつた池田さんの  
ごまは、一九二一年の七月

開校とともに、木造二階建ての一部で間貸しを始めた。池田さんは黒ずんだ分

厚い下宿帳を大学に寄贈し、コピーを大切に保管し

て  
いる。

8

から七年間、池田さん宅に下宿した九大名誉教授の内野健一さん(六六)は感慨深げに若き日を思い起こした。食事はツチエさんの家族と

家主の一家と同居し、隣の部屋との境は障子一枚一。七〇年代まで、それが普通の学生生活だった。「音は筒抜けだつたけど、温かみ

学生の好みが、安全性や快適さを売り物にする鉄筋マンションに移つて久しい。昨年の学生生活実態調査（九大生協）によると、やはり暮らしの九大生の住まいはマンションが最多の48%。アパートが36・8%で続き、賄い付き下宿はわずか0・8%だった。

年間、池田さん宅に住んだ  
九大大学院教授の多田内修  
さん(五九)は話す。

田には下宿仲間と一緒に映画館に繰り出した。下宿していた当時、還暦を迎えたツチエさんのため

家族同然に暮らした

たせた。食料難の時代は食  
材の買い付けに奔走した。

「母は『飯をいっぱい食べる学生が好きでした』。池田さんはわが家が下宿生でにぎやかだった少年時代を鮮明に記憶している。

# 下宿

風呂は銭湯、便所は共同。

6

に内野さんは祝宴を催した。東京に住む元下宿生も含め約五十人が集合し、近くの料亭で涙ながらにツチエさんとの再会を喜んだ。

「親元を離れて暮らす学生のわざわしさが敬遠さにとつての『母親』だつたれ、プライバシーを重視する学生が増えてきた」。地元不動産関係者は分析す



九州大学周辺の下宿は激減し、箱崎キャンパス小松門（右奥）前の通りにもマンションが並ぶ